

溝上 慎一の教育論(動画チャンネル) Number 7

※動画で用いるスライドはPDFで動画下にリンクで貼り付けています

①井上義和先生との対談

— 国策としてのアクティブ・ラーニングへの批判 (前編) —

溝上 慎一 Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 学長・教授

<http://smizok.net/>
E-mail mizokami@toin.ac.jp

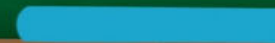
学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問

【プロフィール】 1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、2000年講師、2003年准教授、2014年教授を経て、2019年4月より現在に至る。京都大学博士(教育学)。

*詳しくはスライド最後をご覧ください



※本動画は溝上が個人的に作成・提供するものです



アクティブラーニング
学校教育の理想と現実
小針 誠



講談社現代新書
2471

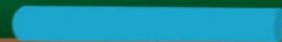
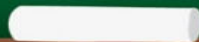
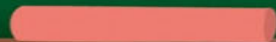
小針誠著

『アクティブラーニング—学校教育の理想と現実—』講談社現代新書（2018年）

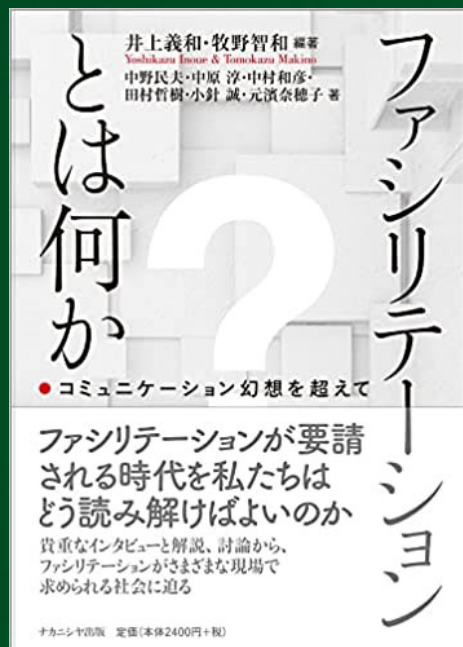
＞溝上の書評

『IDE（現代の高等教育）』2019年1月号

＞ウェブサイト「溝上慎一の教育論」（2018年12月25日）
（講話）書評 小針誠著『アクティブラーニング—学校教育の理想と現実—』（講談社現代新書, 2018）



今回の企画 (Number7)

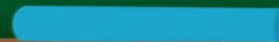
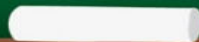


井上義和先生の編著

『ファシリテーションとは何かーコミュニケーション幻想を超えて』ナカニシヤ出版
(2021年12月刊行)

＞第7章 小針誠×井上義和 対談
新著『アクティブラーニング』のその後を語る

- ① 国策としてのアクティブ・ラーニングへの批判
- ② アクティブ・ラーニングの効果について



井上義和 先生のご紹介

いのうえ よしかず

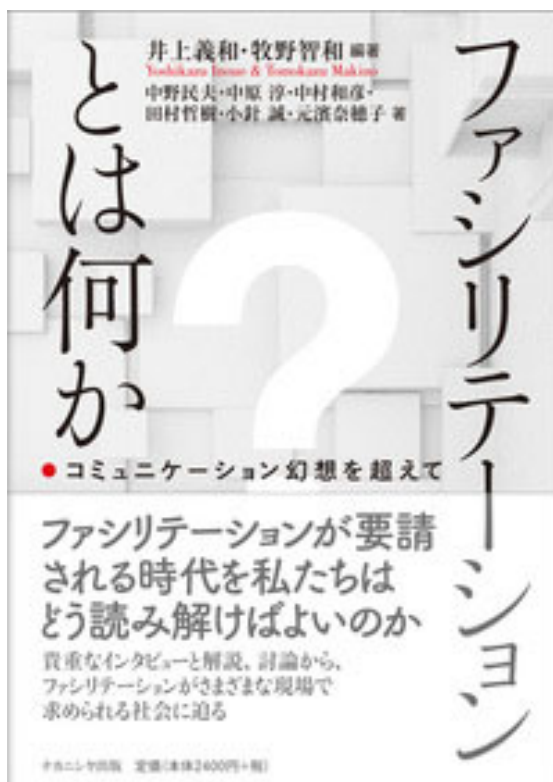
帝京大学 教授



京都大学教育学部卒、教育学研究科中退。同研究科助手、関西国際大学を経て、2012年より現在に至る。



それではご覧ください



「よい実践」と「よい政策」 のあいだ

～07章「国策アクティブ・ラーニングの何が問題か」
(小針誠・井上義和) から～

井上義和 (帝京大学)
inouey@main.teikyo-u.ac.jp

2022年1月27日
溝上慎一先生との対話

目次

- 溝上先生との関わり
 - 溝上先生は1996年に京都大学高等教育教授システム開発センターに助手として着任
 - 私は1995年に京都大学工学部から教育学部に転学部、1997年に卒業して大学院進学、2000年に院を中退して助手になり、2002年から関西国際大学、2012年から帝京大学
 - 学部3回生から修士課程まで（1995～1998）、近衛通にあったセンターに出入りしていたときに何度かご一緒したのを覚えています
- 溝上先生からいただいたお題 2つ
 - ①国策としてのアクティブ・ラーニングへの批判
 - ②アクティブラーニングの効果について ——本書155頁以下について

①国策としてのアクティブ・ラーニングへの批判(1)

- 【論点1】 2つの水準を区別すべき
- 「よい実践とは？」
 - 現場の教師による創意工夫と試行錯誤
 - 学会や研究会などでの研究や研鑽
 - 「下から」の蓄積や伝播による漸進的变化
- 「よい政策とは？」
 - 政策文書→現場への周知・徹底→現場の教師の対応
 - 「上から」の指示と指導による急進的变化

①国策としてのアクティブ・ラーニングへの批判(2)

- 【論点2】「善い実践」は「良い政策」を保証しない
- 2つの水準の分離（従来）
 - 教育の内容や評価には、政策が介入してきた。（よい政策とは？）
 - 教育方法については、現場の裁量が大きく、クラスの特性や教師の信念に合わせて創意工夫されてきた。（よい実践とは？）
- 2つの水準の癒着（現在）
 - 「国策アクティブ・ラーニング」以降、教育方法に政策が介入。
 - 「よい実践」が「よい政策」へと格上げされた。
 - 「上から」の周知・徹底→現場での対応で、懸念される副作用。

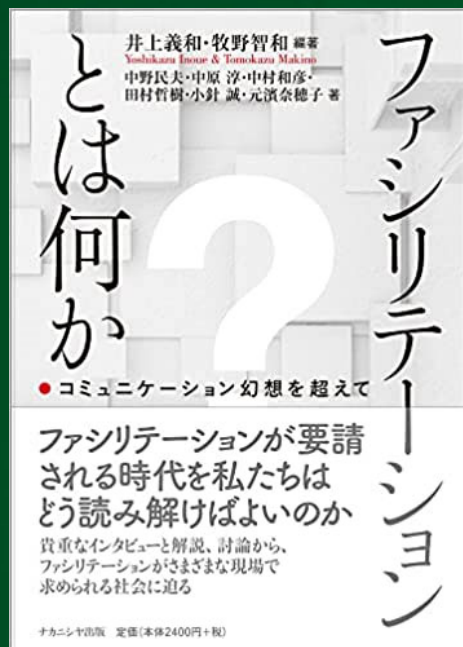
①国策としてのアクティブ・ラーニングへの批判(3)

- **【論点3】政策がもたらす副作用の手当は必要**
- 私自身は、今後の政策がどうなろうと、AL的な手法は確実に現場に浸透し、先生たちも習熟されていくだろうと思っている。
- そして、もしも政策的な介入がなければ、いつまでたっても教育現場は変わらなかっただろうとも。
- EdTechなどもそうだが、日本の公教育の現場は図体がデカすぎて自分から路線転換することはまずないだろうから。
- 政策的なインパクトというのは「転轍機」のようなもので、後は新しいレールの走り方を時間をかけて習熟していくしかない。
- 溝上さんは新しいレールが向かう先をみているのに対して、教育社会学者はその転轍機によるインパクトの副作用をみる。

①国策としてのアクティブ・ラーニングへの批判(4)

- 【論点4】「よい教育」のために異分野間の建設的関係を
- 時間軸と分業を導入すると、解消される対立はいくつもある。
- 教育社会学と教育方法学も、対立ではなく分業の面をみたい。
- 教育社会学は「未来の構想」や「素晴らしい実践」が大の苦手（大嫌いといってもいい）。その代わり、「未来の構想」がもたらすネガティブな側面や「素晴らしい実践」の成立条件には鋭敏なセンスを発揮する。
- この国の「よい教育」のためには、「違い」を気にして感情的に対立するよりは、お互い敬意をもって「分業＝共闘」したほうが良いと思っています。

今回の企画 (Number7)

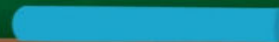
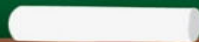


井上義和先生の編著

『ファシリテーションとは何かーコミュニケーション幻想を超えて』ナカニシヤ出版
(2021年12月刊行)

＞第7章 小針誠×井上義和 対談
新著『アクティブラーニング』のその後を語る

- ① 国策としてのアクティブ・ラーニングへの批判
- ②アクティブ・ラーニングの効果について



ご視聴有難うございました

—To be continued—

チャンネル登録をお願いします

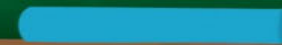
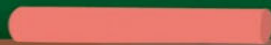
質問、コメントは個人メールで受け付けます。

E-mail mizokami@toin.ac.jp

- お名前、ご所属

※可能なら専門分野や教科、職位なども教えてください、回答の助けになります。
なお、動画内では個人のお名前等は出しません。

- 質問、コメント等



学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 学長・教授

1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、2000年講師、2003年京都大学准教授、2014年教授を経て、2018年9月に学校法人桐蔭学園へ。2019年同理事長、2020年より現職。京都大学博士（教育学）

日本青年心理学会理事、大学教育学会理事、“*Journal of Adolescence*” Editorial Board委員、文部科学省高等教育局スキームD（座長）、中央教育審議会初等中等教育局臨時委員、総合教育政策局リカレント教育審査委員、大学・高校の外部評価・指導委員など。日本青年心理学会学会賞受賞。

専門は、青年・発達心理学・教育実践研究（自己・アイデンティティ形成、自己の分権化、学びと成長、アクティブラーニング、学校から仕事・社会へのトランジション、人生100年時代のキャリア形成など）。著書に『自己形成の心理学—他者の森を駆け抜けて自己になる』（2008世界思想社、単著）、『現代青年期の心理学—適応から自己形成の時代へ』（2010有斐閣選書、単著）、『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』（2014東信堂、単著）、『アクティブラーニング型授業の基本形と生徒の身体性』（2018東信堂、単著）、『学習とパーソナリティ—「あの子はおとなしいけど成績はいいんですよね！」をどう見るか—』（2018東信堂、単著）、『高大接続の本質—「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題—』（2018学事出版、編著）など多数。

<http://smizok.net/>



著作紹介

溝上慎一 (2020). 『社会に生きる個性—自己と他者・拡張的パーソナリティ・エージェンシー—』
(学びと成長の講話シリーズ3) 東信堂

第1章 自己と他者の観点から見る学びと成長

1. 人の発達において他者理解は自己理解に先立つ
3. 自己とは——他者との対峙を通して発現する一個存在
6. 講義—辺倒の授業における学習においてさえ他者は組み込まれている
7. 学習プロセスに他者を組み込む——ペア・グループワークはなぜ求められるのか
9. リフレクション（振り返り）はメタ認知を働かせた言語活動
10. 自己内対話と学習

第3章 エージェンシー

1. OECDの学習者のエージェンシー
3. バンデュラのエージェンシー論—四つの特徴
5. 自己肯定感を高めるのではなく、自己効力感（エージェンシー）を高めよ
6. 内発的動機づけ・自己決定理論——主体的な学習の第I～II層
7. 記憶の情報処理から見た学習—自己関連づけ・自己生成

第4章 教育雑考

2. 自分が生徒の時にはアクティブラーニングをしてこなかった。なぜ今の生徒にここまで求めるのか
3. 社会に生きる個性を育てる——教授パラダイムと学習パラダイムに関連づけて
4. 生徒はアクティブラーニングを熱心におこなうが、教師は成果としての手応えを感じない。そこで起こっていることは？
5. アクティブラーニングと評価

